

本書はバランスのとれた上質な通史に仕上がっている。あえて注文をいえば、「日本の精神医療を特徴づける治療思想」が本書の関心のひとつだとすれば、(一)諸外国と比較しての日本の治療思想の特徴と、(二)(精神医学界内だけの思想の流れではなく)他の医学分野や社会文化的な時代背景と精神科治療思想との関連について、もう少し詳しい論及があってもよかつたと思う。個人的には、第三部をさらに発展させた「精神医療の戦後史」が著者によって上梓される日を待ちこがれている。

(昼田 源二郎)

〔金原出版、東京都文京区湯島二―三―一四、電話〇三―三八―一七―一八四、二〇〇二年四月二〇日、A五判、二二四頁、定価四五〇〇円〕

松本 明知 著

『華岡青洲の新研究』

華岡青洲の研究における本邦の第一人者である松本明知氏がこのたび岩波出版サービスセンターから『華岡青洲の新研究』を限定出版された。華岡青洲は日本の外科学の祖であり、また同時に麻醉科学の祖でもある。著者は弘前大学医学部麻醉科学教室の教授をながらく務めておられ、華岡青洲を論じるのに最もふさわしい医史学者である。さらに、三十五年に

および華岡青洲の研究に携わってこられ、青洲が全身麻醉下乳癌摘出術を行ったのは定説よりも一年前の文化元年(一八〇四年)であったことを明らかにしたのも著者である。この仕事の以降も精力的に華岡青洲の研究をなされ、日本医史学雑誌を中心にその論考を発表されてきた。今般上梓された『華岡青洲の新研究』は、著者の最近の仕事の集大成でもある。

著者が華岡青洲の研究発表をするまでは呉 秀三、宗田一の二氏が研究の中心を担っていた。特に呉 秀三氏の研究は、一九二三年の大著『華岡青洲先生及其外科』に集大成されており、青洲に関する臨床、学統、系譜などあらゆる面に及んでいる。発表以来、約八十年が経過した現在も、青洲研究者が座右におくべき最も価値の高い書物であることに変わらない。

著者は、呉 秀三氏がその著書の中で華岡青洲自筆とした唯一の書物である『乳巖治験録』が、青洲自筆の記録でないことを明解に論証し、呉の誤謬を指摘している。呉の著書の誤りや多くの未解決の問題を指摘したのも著者が最初の研究者である。この論考を読めば、誰しも著者の意見に賛同するものと思われる。

さらに、著者のフィールドワークのすばらしさには感嘆する。乳巖姓名録に記載された一五五名の患者のうち、三十三名の没年月日を实地調査で特定している。この事も、呉氏以後の医史学者が誰しも成し得なかつた偉大な業績である。こ

の業績により、青洲の乳癌手術の予後成績が窺い知れる。次いで、華岡青洲の系譜的研究、妹背佐次衛家の系譜や藍屋利兵衛家の系譜も実施調査で明らかにしている。

中川修亭の「麻薬考」は、青洲の創製した経口全身麻酔薬である「麻沸散」の開発過程のわかる唯一の書物である。この書物に関して、初めて論考したのが宗田 一氏であり、薬学者の立場からこの麻酔薬の開発経緯を一連の論考で明らかにした。しかし、著者は宗田氏が発見した二種類の写本のみならず、合計四種の写本を新発見され、その内容を十分に比較検討し、なぜ青洲がこの処方構成に至るまでに十年近くの歳月を要したのかも明らかにしている。また、「麻沸散」を各種動物実験ばかりではなく、人にも用いて青洲が人体実験しなければいけなかった理由を明確にしている。この点で、著者は実験医史学とも称すべき新しい分野を開拓している。

著者は『乳巖治験録』、『麻薬考』を写真版で著書内に収めており、後学の研究者が誰でも利用できるように気を使っている。このことも、この著書を一段とすばらしいものとしている点である。

これまで、華岡青洲を研究しようと思えば、呉 秀三氏の書物以外では、森 慶三・市原 硬・竹林 弘編『医聖華岡青洲』、南 圭三編『華岡青洲』、上山英明著『華岡青洲先生その業績とひととなり』が研究書として用いられてきたが呉氏以降の書物はすべて呉氏の言及された内容を踏襲している。著者は偉大な医史学者でも史実の誤認がありうるのだと

初めて批判した。この点において、『華岡青洲の新研究』は今後色褪せる事なく、華岡青洲の研究書として座右に備えておかなければならない書物になりうると確信する。

最後に著者が入手した文献、資料類を華岡青洲研究書誌としてまとめている。この書誌は華岡青洲研究を行うにあたって必要欠くべからざる書物がわかるすばらしいものである。

(高橋 均)

〔岩波出版サービスマンセンター、東京都千代田区神田神保町二一三、電話〇三―三二六三―七〇七八、二〇〇二年十月十三日、菊判、非売品〕

日和田邦男 編

『高血圧研究の歴史』

雑誌「血圧」誌に十二回にわたり連載された『高血圧研究の歴史』は血圧測定のリヴァ・ロッチの上腕カフ法の開発以来、一〇〇年にわたる高血圧研究の歴史とその成果、本能性高血圧の成因、遺伝説、中枢神経説、腎臓説、レニン・アンジオテンシン系を詳述し、さらに二次高血圧について言及している。後半では降圧療法の歴史、薬物開発の歴史、薬物の有効性について述べ、薬物療法のガイド・ラインについて初期から今日までの経過を論述している。そして最後に二十一世紀の高血圧研究の方向を議論している。